

研究概要

1 研究の趣旨

新学習指導要領における地理歴史科・公民科の授業では、「問い」を設定し、生徒に「見方・考え方」を働かせて自分の意見を構想（選択・判断）・表現させることが必要になる。また根拠をもって自分の意見を組み立てさせる必要があることから、選択・判断の基準となる資料を複数提示する必要がある。多くの教員が知りたいと思っていることは、具体的な「問い」（発問）と生徒への問いかけ方や、どのような資料を提示して選択・判断させるのか、どのような課題を設定するのか、生徒の取組をいかに評価するか、であると考えられる。

そこで今年度の県立高等学校教育課程課題研究（地理歴史，公民）では，新学習指導要領を踏まえた授業について構想し，多くの教員が参考にできる，再現可能な事例を作成することとした。事例様式は通常の学習指導案に比べると簡素となっている。これは授業内容のエッセンスのみを掲載し，読みやすく分かりやすく提示するという趣旨である。掲載した事例については中間発表段階であり，次年度更に検討を進める予定である。

2 研究の内容

(1) 思考を活性化させる問い

主体的な学習活動を行わせるには，生徒が自然と思考力を発揮できるような「問い」（発問）が必要になる。すなわち，生徒が「なぜだろう」や「どうしてだろう」と自然に考えるような「問い」が必要になる。「問い」については，あまりにも漠然としていれば生徒は考えにくいし，あまりにも細かい「問い」であれば，答えが限られてきて，思考力が発揮されない。そこで，答えが限られないオープンエンドの解答が見込め，かつ生徒が思考力を発揮させやすい発問について考えた。

(2) 選択・判断の基準となる効果的な資料の提示

根拠に基づいて自分の意見を表現させるためには，判断基準となる資料が必要である。そこで視点の異なる複数の資料を効果的に提示し，生徒が考える際の判断基準になるよう検討した。

(3) 獲得した力の「見える化」

学習活動の工夫に比べ，生徒に資質・能力が身に付いたのかを検証することは，あまり活発に検討されていない。「評価」という言葉からは，「成績をつけるための記録を残す作業」という側面ばかりが強調され，多くの教員が面倒だと思ふことが原因であろう。そこで生徒の「資質・能力」が身に付いたかを測定するためにどの側面を見ればよいのかを考えた。「資質・能力」を測る側面としては，ウィギンズとマクタイによる「理解の6側面」を応用し，できるだけ多面的になるよう検討した。

(4) 自己評価の手法

新学習指導要領の「学びに向かう力・人間性」について考えた。具体的にはワークシートやノートを活用し，学習前から学習後にかけての変容を生徒自身が感じ取れる手法を検討した。

3 参考文献

・『理解をもたらすカリキュラム設計―「逆向き設計」の理論と方法』(G. ウィギンズ/J. マクタイ 著 西岡加名恵 訳 2012年 日本標準)